

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530774

研究課題名(和文) 高校在学時と卒業後の進路選択の連続性と変化に関する学校社会学的研究

研究課題名(英文) A Sociological Research on Career Choices at the Beginning and Ending of High School Life

研究代表者

中村 高康 (NAKAMURA TAKAYASU)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：30291321

研究成果の概要(和文)：本研究は、高校生に対する入学から卒業までの継続調査で対象となった高校生を、卒業後まで追跡し、在学時との連続性と変化の実情について明らかにしようとするものである。研究の結果、1) 継続調査特有の脱落サンプルの影響があつてデータ分析には慎重な解釈を要するが、全体として貴重なデータ収集が行えたこと、2) 高校生時点からあつた若者の「やりたいこと志向」は、当初に強く表れるのではなく、卒業後に至るまで継続して高まる傾向にあること、とりわけ就業継続希望の弱い女子において顕著に表れる傾向があることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to find the changes of consciousness and actions from the age of high school students who were sampled in our survey two years ago, to the present. We found that we could gather good data we can analyze for our research, though we have to notice the bias of our data. We also found that many high school students had the consciousness of 'doing what I want to do' and the consciousness increased after graduation. Especially, female students who didn't want to work at a company for a long time were inclined to have this consciousness stronger than others.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：青少年問題、進路選択、パネル調査、学校社会学

1. 研究開始当初の背景

近年、若年者のキャリア形成に関する社会的関心が高まりつつある。そのもっとも典型的な問題がフリーター・ニート問題であるが、それ以外にも従来は日本的な就職メカニズムとして注目されていた高等学校による学校推薦システムのゆらぎが指摘され(たとえば、本田 2005、筒井 2006 など)、一方で少

子化と高等教育拡大策の影響で従来は進学をしていなかった学力層の進学が急増していることにも徐々に研究上の関心が向けられつつある(たとえば荻谷、中村 2006)。このように、進学にせよ正規雇用への就職にせよ非正規雇用への就職にせよ無業にせよ、これらの問題すべての結節点となっているのが、高等学校卒業時点での進路選択の問題な

のである。

こうしたことから、近年では多くの教育研究者がおおむね高卒以後の時点を中心とする進路選択プロセスを追跡する形の大規模なパネル調査を実施してきている。たとえば、学術創成科研の矢野真和・金子元久らの高校3年生を起点とする継続パネル調査の研究、東京大学社会科学研究所の石田浩・佐藤香らの20代から30代の若年層を対象とするパネル調査研究、乾彰夫ら日本教育学会のグループによる20歳パネル調査などが実施されてきた。しかしながら、これらの調査研究には共通して不足している情報がある。第一に、若年層の進路選択にとって無視できない影響力があると考えられる学校在学中の生活や意識に関する情報である。パネル調査のスタートが18歳であったり20歳であったりということで、学校時代の情報はおおむね回顧情報に頼るしかない設計となっている。第二に、いずれも大規模な量的調査であるということである。全体的傾向はこれで把握できるが、選択プロセスのリアリティが十分に再現しきれない部分がある。一方で進路選択の質的な調査研究もあるが(古賀 2007、乾 2006 など)、これらの事例は逆に全体の中の位置づけが難しい部分がある。

申請者はすでに高校生の日韓比較研究を行った際に、韓国の高校生と比べて顕著だった日本の専門高校生の特徴として、教育アスピレーション(進学への意欲)を在学中に徐々に高めていく傾向にあることをデータで確認していたが、この時点では高校生に対する回顧的な調査情報から得た暫定的な知見であった(中村・藤田・有田編 2002)。そこで高等学校に入学してから卒業するまでの全過程を網羅する「学校パネル調査」を考案し、関西圏の5つの高校の入学者全員に対する調査を約2年半前にスタートさせ、高校在学中の生徒の生活や意識の実態と進路選択プロセスの関連を検討した。さらに、この「学校パネル調査」に進路行事・ロングホームルームの観察や生徒・教師へのインタビューといった質的調査も並行して実施した。こうした調査設計により、高校3年間の進路選択過程に関する総合的な情報収集を行ってきた(申請者を研究代表者とする若手研究(B)による研究)。こうした調査設計は進路選択についての大規模パネル調査や質的研究で不足している情報を相当程度補いうるものとなっている。ただし、この科研は卒業直前の進路調査を実施して終了することになっており、3年間追跡してきた高校生たちが卒業した後にはどのような動きを見せるのかということは昨今の研究状況をみても大変に興味をもたれるところであった。

2. 研究の目的

以上のような背景のもとで、本研究の目的は次のようになる。すなわち、本研究は、平成19年度までに科学研究費若手研究(B)で研究代表者が実施した、高校生に対する入学から卒業までの継続研究の続編というべき調査研究であり、その調査で対象となった高校生を卒業後まで量的・質的に追跡するものである。高等学校在学中の3年間で蓄積された豊富な調査データと、本科研の調査で得られる卒業後の状況を把握するデータを接続させて分析することにより、これまでにない総合的な高校生の進路選択研究を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の方法の柱は、高校3年間継続のパネル調査を延長し、同じ対象に対して卒業後1年半の時点で追跡的アンケート調査を実施したということである。調査時点を1年半の時期にセットするのは、あまりに近すぎると変化と連続性の問題を扱うデータとなり得ないこと、一方であまりに遠すぎるとは若年層の場合は特に進学や就職で引越しましなどをしてしまい、追跡自体に困難な要素が増えてしまうこと、調査準備の期間をある程度確保する必要があること、質的調査のタイミングも考慮しなければならないこと、などを総合的に勘案した結果である。

調査は調査対象校と協力体制をとり、調査対象校の指定封筒を使う・調査対象校と連名での調査とするなど、回収率を改善するための工夫を行った。卒業生調査の回収状況は、他の先行事例にもあるように十分な返送が期待できない部分があり、実際本調査でも必ずしも高い回収率が得られたわけではないが、分析に必要な一定数のサンプルを確保することはできた。なお、調査票の回収状況は次の図1に示した通りである(片山悠樹作成)。第6回調査が本科研における卒業生調査の回収率を示している(当該学年の入学者数を100とした場合)。

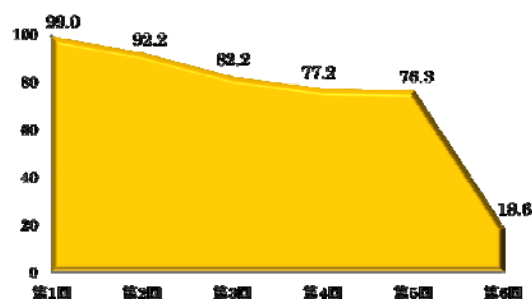


図1 調査回収状況 (%)

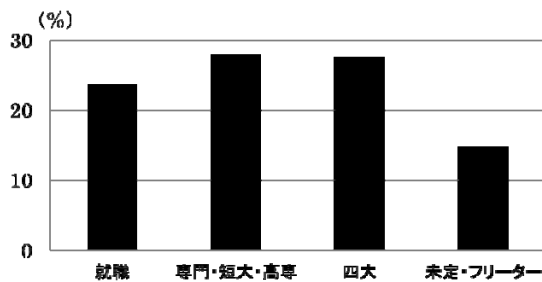
4. 研究成果

本研究で収集したデータは多岐にわたり、今後も様々な角度から分析することが可能であり、貴重なデータの作成ができたことは、本研究の非常に大きな成果としてあげることができる。

以下では、これまでに分析を行った結果のうちで、特に注目すべきポイントに絞って、研究成果を具体的に報告する（詳細は、以下に記載の【学会発表】②西田・片山・中村ほか（2010）にて報告している）。

第一に、具体的な内容の分析に入る前提として、卒業生調査サンプルの脱落傾向の分析を行った。その結果、男性で回収率が女性に比べてやや低くなること、学科別には回収状況はあまりかわらないが、進路別では若干の違いがあること、とりわけ「高卒直後に未定/フリーターだった」層は調査に回答しない傾向があることが明らかとなった（図2）。また、高校時代の成績については、良い成績だった者ほど調査に回答する傾向があること、社会階層については特に回収状況に影響していないことが明らかとなった。

図2 高卒後の進路×回収率



以上の分析を総合的に判断するため、これらの諸変数を同時に組み込んだモデルで多変量解析（ロジスティック回帰分析）を実施したところ、様々な変数を統制したうえでもなお、性別・成績・進路（未定/フリーター）は卒業生調査に非協力になりがちであることが明らかとなった（表1）。

表1 脱落サンプルの規定要因分析（ロジスティック回帰分析）

	model 1		model 2	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
性別ダミー	0.594 **	0.592	0.730 **	0.482
学科	0.276	0.759	0.073	0.930
成績	0.393 ***	1.482	0.572 **	1.777
専門・短大・高专ダミー	0.242	1.273	-0.118	0.889
四大ダミー	0.180	1.174	0.107	0.860
未定・フリーターダミー	-0.481	0.617	-1.197 **	0.297
定数	-0.795 ***	0.451	-0.621 **	0.537
N	1017		817	
χ^2	106.612 ***		108.121 ***	
**列数一致	1098.715		940.218	
Nagelkerke R ²	0.051		0.108	

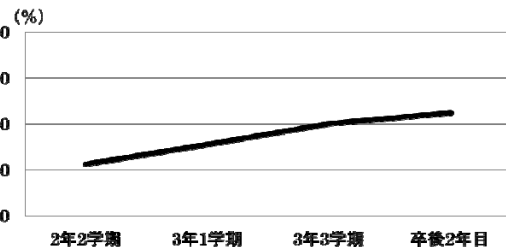
*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, $p < 0.10$

第二に、以上の分析を踏まえたうえで、在学時の状況から継続した質問項目を用いた分析を行った。その中でも分析メンバーの一人である片山悠樹が注目したのは、「やりたいこと志向」の分析である。この分析結果が本科研の研究成果全体を代表する知見といえるので、ここではその概要を簡略に報告する。

「やりたいこと志向」はすでに久木元の研究で検討されているが、そこでは正規就業への道が険しい女子においてこそ、かえってやりたいこと志向が表面化すると指摘がある（久木元真吾 2003, 『『やりたいこと』という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結—』『ソシオロジ』148号』）。本調査においても、同様の関心から「やりたいこと志向」については、高校在学時点の調査から調査項目化してきた。

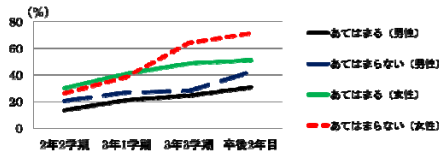
そこでまず継続パネル調査の特性を生かして、調査時点ごとの「やりたいこと志向」の趨勢を分析してみた。「やりたいこと志向」は、その言葉のイメージから、当初に実現性の低い進路希望が多く、時間がたつにしたがって徐々に現実的な志向性に切り替わっていく傾向があるように予想されたが、実際には、次の図3-1にもあるように、全体としては年齢が上がるたびに増加傾向が見られた。

図3-1 「やりたいこと」志向の推移



そこで前述の先行研究から推論される仮説を検証するために、性別および長期就業希望意識の有無によって「やりたいこと志向」の推移をさらに詳細に検討した。その結果、以下の図3-2にあるように、女性においてのみ、長期就業を否定する意識と「やりたいこと志向」が相関する傾向が、高校3年次から卒業後にかけて生じていることが明らかとなった。

図3-2 「長期就業」認識×「やりたいこと」志向（男女別）



こうした傾向が他の変数を統制したうえでも見られるほどの頑健性を示しているかどうかを確認するために、やはり多変量解析の手法によって分析を試みた。その結果、3年3学期の時点でも、また卒業後2年の時点でも、女子においては長期就業を継続しない場合に有意に「やりたいこと志向」が高まるという傾向が確認された(表2、表3)。

以上のことから、「やりたいこと志向」は卒業後2年目においては、在学時に比べてさらに高くなる傾向を有しており、それは特に女性に顕著な傾向となっている。在学時でも長期就業意識の低い層では高校3年次にすでに「やりたいこと志向」の分化がはじまり、卒業後はさらに明確化するということが明らかとなった。ただし、これらの分析結果は、特定の地域の高校卒業者を対象としたデータから得られたものであり、また前段でも検討したように、回収状況の偏りを伴ったデータである。今後はこのデータをさらに詳細に検討し、より一層確かな知見に高めていく作業が必要である。

表2 「やりたいこと」志向上昇の
規定要因分析 (3年3学期)

	全体		男性		女性	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
性別	-1.050 ***	0.349	—	—	—	—
学科	0.1928	1.2131	1.2871 *	3.6003	0.3471	0.2131
成績	0.2718	0.8011	0.2528	0.2789	0.2148	0.2180
「長期就業」への意向	0.4968	0.8068	0.2348	1.2392	0.8992 *	0.4110
卒業後2年目	-0.818	0.497	-0.733	0.481	-0.421	0.898
「やりたいこと」志向(3年1学期)	1.779 ***	5.922	1.788 ***	5.982	1.880 ***	6.666
定数	0.053	1.056	-1.808 **	0.165	0.340	1.619
N	920		171		115	
χ^2	80.826 ***		18.383 **		28.925 ***	
決定係数	.228.331		.114.886		.186.305	
Nagkerke R ²	0.305		0.211		0.266	

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, +p<0.10

表3 「やりたいこと」志向上昇の
規定要因分析 (卒業後2年)

	全体		男性		女性	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
性別	0.658 *	0.803	—	—	—	—
学科	0.600 +	1.829	1.451 **	4.293	-0.687	0.507
成績	0.020	0.980	0.119	1.121	0.265 +	0.302
「長期就業」への意向	0.756	0.481	0.419	0.612	1.098 *	0.268
卒業後1年目	0.186	0.822	0.855	0.687	0.785	0.555
「やりたいこと」志向(3年1学期)	1.418 ***	4.121	1.872 ***	6.301	1.285 **	3.615
定数	0.190	1.209	1.084 +	0.338	0.832 +	2.958
N	241		120		119	
χ^2	47.476 ***		22.626 ***		19.613 **	
決定係数	.281.123		.122.333		.140.681	
Nagkerke R ²	0.329		0.228		0.206	

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, +p<0.10

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① 西田亜希子・片山悠樹・中村高康他「進路多様校生のその後—高校入学時から卒業後2年の継時的研究—」(2010年9月18日・日本教育社会学会)、関西大学
- ② 中村高康・西田亜希子・藤原翔・岩田考・片山悠樹「進路多様校からの進学—高校3年間の進路変容過程に関する継時的研究(3)—」(2008年9月19日・日本教育社会学会)、上越教育大学

[図書] (計1件、ただし関連研究として)

- ① 中村高康編著 (2010)『進路選択の過程と構造』ミネルヴァ書房 312頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 高康 (NAKAMURA TAKAYASU)
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：30291321

(2) 研究分担者

岩田 考 (IWATA KOU)
桃山学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：60441101

片山 悠樹 (KATAYAMA YUKI)
名古屋商科大学・経営学部・専任講師
研究者番号：40509882

西田 亜希子 (NISHIDA AKIKO)
京都精華大学・人文学部・講師
研究者番号：70554319